

運動会における身体表現遊びの実際

The Trend of the Body Expression Plays at Athletic Meetings

遠藤 晶*・江原千恵**・松山由美子***・内藤真希****

ENDO Aki*・EBARA Chie**・MATSUYAMA Yumiko***・NAITO Maki****

Abstract

The research clarified the contents and the methods in educating preschoolers' body expression, through analyzing the contents and the forms of the body expression activities from the programs at athletic meetings in preschools.

The research showed the numbers of the programs for "body expression", and for "rhythm and dance", were almost equal.

Therefore, the programs were classified into two patterns: "the body expression" aimed for enjoying the process of making the stories and expressing them, and "the dancing" aimed for enjoying the rhythm to music.

1. はじめに

本研究は幼稚園・保育所の運動会のプログラムの内容から、幼稚園・保育所の運動会における身体表現遊びの実施内容、実施形態を分析し、幼児を対象とする身体表現の教育の内容・方法を明らかにしようとするものである。

平成元年の幼稚園教育要領が改訂された際、遊びを通しての子どもへの学びが強調されたが、以来、幼児の身体表現の教育については、指導をすること、教え込むことに対してのためらいがもたれてきた。改訂後約20年が経過したなかで、身体を動かす体験が不足し、身体を使うことが苦手な子どもの育ちが見えてきた。

平成20(2008)年1月17日の中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」において、これまでの学習指導要領の理念を実現するための具体的な手立てが十分でなかった課題に関して、子どもの自主性を尊重する余り、教師が指導を躊躇する状況があったことを挙げており、教師が子どもたちに教えることを抑制するよう求めたものではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であることはいうまでもない。平成元年の改訂以来幼児を対象とした身体表現の教育においては、自

己表現を楽しむ、自由という言葉の魔力に強く影響され、指導することを躊躇して動きを引き出すことに苦慮して身体を動かす喜びを子どもに十分教えられない保育者の混迷の時代があった(古市 2007)¹。

平成21年度から施行される幼稚園教育要領では、幼稚園での生活の中で、音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と自分なりの表現を培うことが大切であることから、表現する過程など、表現に関する指導を充実することが付け加えられた。領域「表現」に関しては、「内容の取り扱い」に、「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるようにするよう配慮したり、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」というように、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫することが新たに示された。

幼稚園や保育所において、身体で表現する機会として運動会は重要である。日常の保育のねらいや内容とも関連しながら、時間をかけて積み重ねたものを発表する機会でもある。具体的な運動会の身体表現の題材や内容の理解することは、幼稚園・保育所の身体表現の実態を明

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 姫路獨協大学 (Himeji Dokkyo University)

*** 四天王寺大学 (Shitennoji University)

**** 新光明池幼稚園 (Shinkomyoike kindergarten)

らかにするという点で意義があると考えた。

そこで、本研究では、表現する過程を大切にするという新たなねらいの意義を考えるために、これまでの身体表現の教育実践の成果を検討するものである。幼稚園・保育所の身体表現教育の内容・方法を知る手がかりとして、平成元（1989）年からの20年間に行われた、近畿圏内の幼稚園・保育所で実施された運動会のプログラムの内容を分析し、幼稚園・保育所の運動会における身体表現の内容を明らかにする。

2. 幼児期の運動会に関する研究

(1) 運動会の成立と学校教育への位置づけ

日本における運動会は、明治7年（1874年）東京築地の海軍兵学寮で行われた「競闘遊戯会」が初めてであるといわれている。『海軍兵学校学寮沿革』²によると内容は18種目からなり、競走・幅跳び・高跳び・砲丸投げなどの競技的内容と二人三脚やおんぶ競走のような娯楽的な内容であった。

明治19年文部省令により「小学校ノ学科及其程度」が定められ、「体操」が教科として初めて位置づけられ、「遊戯」「軽体操」「隊列運動」がその内容とされ（石附1992）³、「運動会」という名称が用いられ始めた。この時期から、小学校における運動会の原型が見られるようになる。

明治24年（1891）になると、文部省令により「小学校教則大綱」が制定され、体操は高等小学校において男子に主に兵式体操、女子には普通体操または遊戯を教えるものとされた。それに伴い運動会にも、隊組織を明確にするための旗を使用や、対抗戦や隊列行進などが目立つようになる。

実施の形態は地域の小学校との合同、小学校と中学校などとの合同形式で行われ、連合運動会ともよばれていたが、明治33年（1900）小学校令改正により「体操」が必修化され、「体操場」が設置されたことで学校単独での開催が可能になり、「校庭運動会」として普及していった。運動会の種目としては、陸上競技関係の種目、体操関係の種目、遊戯・ダンス関係の種目などが行われていた（木村他1995）⁴。

明治7（1874）年に、伊沢修二が唱歌を歌いながら動作をする遊戯を考案して以来、明治14（1881）年、小学校教則綱領25条で「初等科ノ初メハ適宜ノ遊戯ヲ以テ之ニ充テ漸次徒手運動ニ及フヘシ」と遊戯の指導がみとめられ、唱歌をとともなう遊戯は明治30年代初めまで体操に代わる運動として小学校低学年や女子を対象に教えられていた（村山2000）⁵。

特に、初等教育においては明治23（1880）年から、唱歌遊戯が運動会に取り入れられた。当時発刊された唱歌集、遊戯書および関連資料に載っている遊戯が運動会に

取り上げられ、楽譜や歌詞の解説書が手がかりとなっていた（高橋1997）⁶。運動会は授業の成果を発表するとともに、児童の表現能力の高揚の場として格好の場であったと考えられる。

木村ら（1995）は、日本の学校における運動会の成立には、欧米諸国のAthletic Sportsの影響を受けたものと、体育の普及を図るために行われた体育演習会の方式があるとしているが、欧米諸国からの影響を受けながら、日本独特の形態として定着してきたことを見ることができる。岸野（1964）⁷は、1日の授業を中止して運動会に費やすこと、保護者や地域の関係者が参加して行われること、競争的・娯乐的・デモンストレーション的な要素を含む運動会の形態が日本独特のものであるという。その背景には、祝祭的性格・儀式的要因を学校の運動会に位置づけたことも影響している。当時の政府が地域の祭りを統制し、学校の運動会にその役割を持たせたため、「村ぐるみ・町ぐるみのマツリ的な性格」（山本・今野1973）⁸が色濃いというのも特徴である。

佐藤（1987）⁹は、運動会が持つレクリエーション性が、参加者のくつろぎや気晴らし、参加者同士の連帯感を強め、集団の帰属意識を高める役割があると述べている。そのことによって学校だけでなく地域や社会にも運動会が普及したと述べている。

(2) 運動会の教育的意義

昭和39（1964）年の幼稚園教育要領には、領域『社会』において、「3.身近な社会の事象に興味関心をもつ」「（6）幼稚園の行事に喜んで参加する」と示されている。さらに、幼稚園教育指導書の領域編『健康』（1969）第4章の16には、運動会の具体的事項が示されている。そして、平成元（1989）年の幼稚園教育要領の改訂の際、行事に関しては「第3章 指導計画作成上の留意事項」「（6）行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然な流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し適切なものを精選し幼児の負担にならないようにすること」と示されている。しかし、運動会の詳細についての記述はされていない。

平成元（1989）年幼稚園教育要領改訂前後の時期における運動会のとらえ方に関する研究を概観すると、保育者は運動会について、幼稚園において園の行事の中でも重要な位置づけをしており、日常保育や運動遊びの発表の場であることとしている（宗高・前橋1989）¹⁰。さらには、「保護者と一緒に1日を過ごすレクリエーションの場」であり、「幼児の成長と発達の実態を保護者に知らせ、幼稚園教育の理解を図るための機会」（松永1990）¹¹ととらえている。また、友達と協力して力いっぱい参加するということ（前橋・宗高1989）¹²も、重要な運動会

の意義ととらえられている。これは、明治期以来運動会の果たして来た役割とほぼ一致するところである。運動会には子どもの自主性を尊重し、計画準備や当日の運営にも参加させるなど、子どもの主体性を重視し、運動会までの過程のなかで、能力を引き上げようとせず、無理強いしないこと（片山他 1994）¹³が、強調されていた。

(3) 運動会の内容・種目

幼稚園の運動会の内容については、昭和 14（1939）年に発行された『幼児の教育』第 39 号に、「幼稚園の運動会」として、佐々木等（1939）¹⁴が「運動種目の如きも、彼らの心身の発達に最も適当したものであらねばならないこと」とし、『おゆうぎ』にしてもあまり複雑な動作を要求することは適当ではないと示している。

同年に土川五郎（1939）¹⁵は「幼稚園に於ける運動会と遠足」の中で、

- 一、遊戯会と名付けて、徹頭徹尾「遊び」で始終したいのである
- 二、主題は幼児生活に、興味、簡易、適切なものを選びたい。しかも、やさしいことば幼稚園実習にわかり易いことばで、プロに表したい。
- 三、全時間は約二時間位がよい所でせう。
- 四、幼児一人に少なくとも三回以上出場する様にした
- 五、唱歌、遊戯、律動遊戯を団体的に行うことは二回位を加へ一回は年少年長に分ち、一回は全体同時に行ひたい。而して一回に三種又は年長者は五種を程度とし、一斉に揃ふと云うよりは其一人一人が真剣に楽しく行はせたい。

と記している。

昭和 22（1947）年に発行された『幼児の教育』第 46 巻には、岡崎修子¹⁶が運動会は何のためにするかについて、「身体諸機能の調和的発達をはかる、とか、体力を養うとか、運動を通して社会的性格を育成するとか、大きく“体育”という目的をもってきたようなむずかしい事はいくらかでもいえるでしょうが・・・（中略）其の一日はどこまでも、三百六十五日中の特別な一日に違いないのです。ですから、つまり普段の日とちがった気分のうちに自分もたのしみつつ、人をも楽しませる愉快な一日であってほしい」と述べている。普段のままを見てもらうことについても、お弁当や服装などが用意されたり、普段とは違う気持ちをもったりするなど、特別な日だからこそ意義があるのであるという。運動会の内容としては、共に楽しむためにある程度形が整い、安心した気持ちでのびのびとできるものであった。お遊戯などについては子どもが好んでする複雑でないもの、できるならば子どもの生活の中での動作を、子どもの生活をよく知っている先生が、まとめあげられることができることを示唆し

ている。

(4) 運動会における身体表現遊びの事例

ここでは、運動会における身体表現遊びの事例を保育関係の雑誌等に掲載された内容を見ていくことにする。

大正 12（1923）年『幼児の教育』に、当時の東京女高師幼稚園保姆、坂内みつによって、『動作遊戯 ピョン太郎の運動会』が紹介されている¹⁷。実際に行った場所や対象の年齢については明記されていないが、保育者によって作られた教材としての遊戯作品と思われる。遊戯と競技を取り入れながら、せりふや動作で遊ぶ内容が記録されている。

組の子ども全員参加で、母蛙、ピョン太郎（子蛙）、ピョン吉（ピョン太郎の友達）、先生（蛙四匹）、のほか、準備掛（蛙大勢）、競技者（蛙五六匹）遊戯者（蛙大勢）の登場人物と、紅白旗数本、などが準備される。第一場はピョン太郎の家での様子で、「お母様よいお天気よ、うれしいな、早く運動会にいませう」というせりふと、旗を振りながら出て行く場面から始まる。第二場面は網、せりふ遊戯（女兒全体）と競技（ボールをつるしたもの）を準備し飛びつく競争）で運動会の場面をあらわし、最後はスキップしながら退場するという流れである。振り付けのある唱歌遊戯ではなく、せりふや遊びを取り入れた表現を主とした教材といえる。

平成元年の幼稚園教育要領が改訂される以前に、安田（1980）¹⁸は、振りつけのある曲、あるいは曲に保育者が振りつけたものを一方的に教え込み、そろってきれいに見栄えするように練習を重ねて運動会の準備をしてきたことに疑問をもち、普段の保育の中でしている、身体を通しての表現活動を運動会で発表したことを報告している。年中児 29 名を対象として、即興活動から出てきた動きをモチーフとして表現あそびを構成したものを、運動会で発表した。発表作品に関しては、題材についての話し合いや、表現の過程が大切であると述べている。

本研究では、この領域「表現」の内容の変化にもとづき、特に運動会の種目の中でも、表現領域に関わると考えられる「体操・表現・リズム・ダンスなど」の種目に関して、プログラムを通しての種目の読み取りを行い、近年の運動会の種目内容を明らかにすることで、領域「表現」で明記されている、子どもが表現したいという気持ちを重視し、表現する過程を広げるための支援につなげることができるように、生かしていければと考える。

3. 研究方法

(1) 調査対象：

大阪・奈良・和歌山・兵庫・和歌山・京都・三重・岡山の公立・私立の幼稚園・保育所 51 園における運動会のプログラムを分析対象とした。詳細は表 1 のとおりであ

る。

(2) 調査内容：

実際に運動会で配布されたプログラムから、運動会の内容を調査した。なお、この調査では、平成元年の幼稚園教育要領の改訂と平成2年の保育所保育指針の改定に伴い、5領域の分野が大きく変更となった年以降に実施された運動会のプログラムを扱っている。その理由として、平成元年以降、幼稚園教育要領の「表現」領域においては、内容の取扱いの項目の中で、「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」と明記されることとなり、特に、「表現する過程」を大切にすることが求められているのが特徴として挙げられるからである。このような位置づけから、運動会の表現領域の作品づくりにおいては、日常保育での取り組みを大切にしながら、子どもの思いを受け止めていくことが必要となる。さらに、試行錯誤しながら、子どもと表現する過程を楽しみ、その延長線上に運動会の場を通して発表する作品につながるような位置づけを期待されていると思われるからである。

なお、種目の分類に際しては、幼児教育の経験があるもの、もしくは養成校に従事している者で行った。

4. 結果と考察

(1) 運動会のプログラムとテーマ

運動会の大きなテーマとして取り上げられていたものには、「オリンピック」や「忍者」などがあり、そのテーマに基づいて種目構成が行われている園もあった。また、「うめぼし」に見られるように、園独自の地域性を生かした内容のものも見られた。

このような独自性は、運動会の内容だけではなく、来た人に配布されるプログラムのデザインにまで影響を与えている例も見られた。子どもの絵を挿入したプログラムや、運動会のテーマに合わせてデザインを工夫した手作りのプログラムなどが見られた。写真1は、忍者をテーマにした運動会の構成で、プログラムも忍者の巻物にしたものである。

(2) プログラムに見る表現系の内容

表2は、各種目における表現系の種目別の度数の結果を示したものである。度数の範囲は、2-40であった。

さまざまな種目名が並ぶことや、「(カテゴリなし)」が17と多いことから、「かけっこ」や「リレー」のような「競技」系の種目と違い、「表現」系の種目については、保育現場でも考え方が統一されていないことが分かる。「表現」に関しては、現場独自でさまざまな解釈がなされて実践されているのではないだろうか。しかし、近隣の地域では同じような種目名をつけていることも分かり、地域性が大きく影響しているのではないかということが考えられる。

表1 分析対象の都道府県と運動会実施年度

	2008	2000 ~2005	1989 ~1995	不明
大阪	14	2	2	0
奈良	7	1	0	0
京都	0	8	7	1
和歌山	2	0	0	0
兵庫	3	0	0	0
三重	1	0	0	0
岡山	2	0	0	0
不明	1	0	0	0

注：地域及び年度不明については、運動会のプログラムの表紙より確認できなかったことによるものである

写真1 巻物のプログラムの例

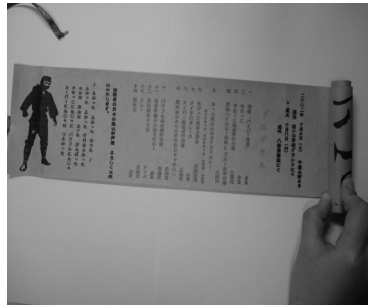
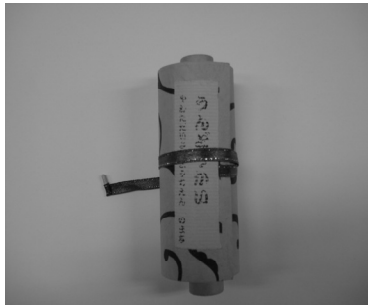


表2 各種目別の度数と頻度(%)

No.	種目の内容	度数	%
1	体操	40	32.3
2	(カテゴリなし)	17	13.7
3	リズム	14	11.3
4	団体演技, 団演, 演, 演技	7	5.6
5	ダンス	6	4.8
6	パラバルーン・バルーン演技	6	4.8
7	フォークダンス	4	3.2
8	遊戯	4	3.2
9	日本舞踊	3	2.4
10	オープニング	3	2.4
11	リズム表現	2	1.6
12	表現	2	1.6
13	親子体操	2	1.6
14	親子ダンス	2	1.6
15	フラッグ・フラッグ演技	2	1.6
16	おみこし	2	1.6
17	組体操	2	1.6
18	鼓笛	2	1.6
19	親子演技	2	1.6
20	ポンポン	2	1.6

(3) 表現系の種目の特徴

①体操

種目の特徴を見ていくと、最も度数が高い種目としては「体操」であったが、ほとんどの幼稚園・保育所において、運動会では実施されている種目であることがわかる。体操は、演技の最初に行われ、さらに整理体操として、最後に行う流れが多くみられた。体操には、「怪我を防止する」「気分を落ち着かせる」「今から運動会が始まるという心構えができる」また、「曲に合わせて体を動かすことにより、抵抗なく取り組むことができる」さらに、「全員で行うことによって、楽しさが増す」といった効果が期待できるのではないだろうか。内容としては、最初の種目として「ラジオ体操」をしているところもある。最後は整理体操としての位置づけが多くみられた。懐かしい「はとぼぽ体操」もあれば、テレビ番組やキャラクターの影響として見られるような、「ディズニー体操」「アンパンマン体操」「ポケモン体操」などがあつた。また、ケロポンズの代表作として、長く人気の「エビカニクス」なども見られた。

②ストーリー性のある身体表現の作品

次に多くみられた種目としては、「(カテゴリなし)」であった。そこで、中身を詳細に調査した結果、(カテゴリなし)における出し物は、「せんたくかあちゃん」「あひるの親子」「きみは地球の宝物」などのように、絵本等を題材にして、日常の保育の遊びを関連させながらオリジナルのストーリーを作り、身体表現の作品につなげたものが多くみられることが明らかになった。

③リズムを楽しむ表現

続いて「リズム」に関する種目が多くみられたが、「100%勇気」「ポンポコたぬき合戦」「よさこいダンシング」などのように、音楽に合わせてリズムを楽しみながら表現する作品が多く見られた。

④「団体演技・団演・演・演技」

次に、「団体演技・団演・演・演技」の種目であるが、表記の仕方が異なるだけで、同じ内容であると推測する。具体的な中身であるが、「大漁ソーラン」「おまつり忍者」など、「(カテゴリなし)」の種目と類似しているものが多くあつた。

⑤「リズム表現」「表現」

さらに、「リズム表現」「表現」の種目では、「キャベツとあおむし」「やさいのパーティー」のように、日常保育を通して、子ども達の遊びから、題材を考えて表現活動につなげている作品であった。幼稚園教育要領や保育所保育指針の中では、大切にしなければならぬ活動であるが、運動会の種目として実施している園は今回の調査では少ない傾向が見られた。

⑥小道具などを用いる表現

その他の種目としては、小道具などを使った「パラバルーン」「フラッグ」「鼓笛」「ポンポン」等の種目も多く見られた。これらの種目は、見た目も華やかで、見栄えも良い種目として、運動会のような“ハレの日”に取り入れられている。フラッグを使った演技や鼓笛隊、組体操などは、私立幼稚園や保育所においては特に、その園の特徴として取り組んでいる保育活動でもある。その活動は、日常保育の中でも盛んに取り入れ、園全体で力を入れている保育活動として位置づけられている。「組体操」は、筋力を使うので、全身のバランス能力や、筋持久力などを高めることができる種目である。「パラバルーン」と同様に、見応えのある種目でもある。他者に“見せる”ということを意識した種目であり、自己評価よりも他者評価につながる可能性がある種目であることが示唆される。

⑦親子参加のダンス

また、「フォークダンス」「日本舞踊」などのように、全園児だけではなく、保護者と子どもと一緒に競技として実施されている種目も見られた。「タタロチカ」「花笠音頭」など曲も周知されているものが多く、皆が知っている活動として、気兼ねなく楽しんで参加することができる。参加することによって、人と関わりが生まれる活動として、参加者全員で行う種目として取り入れやすいことが推測できる。

このような保護者とともに踊る種目の内容は「親子体操」や「親子ダンス」「親子演技」という種目名の内容と類似しており、保護者と子どもとがともに体を動かすことや、踊るということを、運動会の中でも重要視しようとしている保育現場があることが示唆される。2008年度に実施された運動会のプログラムの中には、保護者だけでなく、地域のお年寄りや踊ることが明記されているなど、地域のコミュニティとして運動会が役割を果たしている例も見られる。

(4) 表現系とリズム系の比較

さらに、表現領域の種目の特徴を見ていくために、表1の種目を「表現系」((カテゴリなし)・団体演技・団演・演・演技・リズム表現・表現)と、「リズム・ダンス系」(リズム・ダンス・遊戯・日本舞踊)の種目に大別した比較検討を行った。

その結果、表3に示したとおり、「表現系」と「リズム・ダンス系」の種目は、ほぼ同数を示すことが明らかになった。

これらの結果から、運動会では、ストーリーを作り表現する過程を楽しむ身体表現の作品と、音楽に合わせてリズムを楽しむような、ダンス系の作品が主に取り入れられていることがわかる。これらの種目には、

友達と力を合わせたり、呼吸を合わせるが必要となったり、曲やタイミングに合わせることの難しさもあるが、作品が出来上がった時の達成感は、他の種目よりも感じられるのではないだろうか。

表3 表現種目に関する度数と割合

種目の内容	度数	%
表現系	28	50.9
リズム・ダンス系	27	49.1

5. まとめ

(1) 運動会のテーマと内容

幼稚園や保育所で運動会における身体表現遊びの実態を知る手がかりとして、運動会のプログラムから身体表現に関わる内容を検討した。

幼稚園・保育所の運動会では、テーマを設定し、対象の年齢に応じた内容・種目を構成している。テーマの設定については、子どもの興味に即したものの、地域の特性を生かした保育の流れのなかで設定されていた。

プログラムのデザインや丁寧な形で配布されているところからも、見てもらうことを意識した園の行事として大切な役割を果たしていると思われる。

(2) 運動会の身体表現遊びの内容の特性

幼稚園・保育所の運動会における身体表現の内容は

- ①体操
- ②ストーリー性のある身体表現の作品
- ③リズムを楽しむ表現
- ④「団体演技・団演・演・演技」
- ⑤「リズム表現」「表現」
- ⑥小道具などを用いる表現
- ⑦親子参加のダンス

が行われていた。

運動会では、古くから親しまれている「体操」や新しい楽曲の「体操」など、使用楽曲には変化がみられるものの、準備運動と整理体操としての位置づけは運動会が始まった初期のころからとは変わりなく実施されていた。

一方、「団体演技・団演・演・演技」「リズム表現」「表現」などのカテゴリに含まれているもの、あるいはカテゴリがなく表現の内容をそのままタイトルになっているものは、発表のストーリーを大切に、幼児のアイデアを盛り込みながら作品にしていく身体表現遊びといえる。かつて歌にあわせて動きをつけた唱歌遊戯に端を発して親しまれてきた『お遊戯』とは異なる、発表の素材である。平成元年に領域「表現」が

設定され、身体で表現することの意味が大きく問われ、幼児の身体表現の方法が模索されたが、運動会の種目として実施している園は今回の調査では少ない傾向が見られた。その背景には、身体表現の題材の選択の仕方や、展開の仕方など、保育者にとって指導の難しさがあることが考えられるが、かつて、唱歌遊戯が定着した背景に、運動会の教材資料が存在していたことを考えると、表現の指導の手がかりとなる運動会の教材資料が少ないというのも、身体表現遊びの定着を妨げているとも考えられる。

(3) 運動会における身体表現の教育について

身体表現の内容と方法については、前述したように多岐にわたる表現方法を用いて、保育者の工夫によって運動会の当日に形あるものに仕上がっていく。

保育者の無理な教え込みは避け、子どものアイデアを取り入れながら進めることなど、完成するまでの過程を大切にすることはいうまでもない。作品が完成する過程には、葛藤を通してさまざまな発見や喜びが生まれる。

今回調査した運動会の種目にも、保育者の問いかけから、運動会の作品に広がったものもあるであろう。しかし、運動会の当日を観るだけでは、作品づくりの途中経過での子ども達や、保育者の様子や思いが伝わりにくい。さらに作品が出来上がる過程に居合わせた者だけにしか、表現している内容や意味が伝わりにくいことも、困難なこととして挙げられる。

これらの過程は、身体表現の作品の出来栄を見る際に、大きな影響を与えると考える。幼児の表現の完成度を期待するあまりに、子どもに負担をかけることもある。完成までのプロセス、表現が生まれるまでのプロセスなど、表現が生まれる道筋に立ち会うと、子どもの表現の理解度も変わるであろう。そのためにも、見る側が過度の期待を持つよりも、幼児の表現を温かく見守るまなざしが必要になる。このように、運動会の作品を見る側の目を育てる必要性も重要である。

(4) 今後の課題

まず最初に、今回研究対象としたプログラムの収集に関しては、時期によって対象とするプログラムの数が不揃いであったり、地域ごとに均等な数がそろっていないという課題を残した。運動会は地域によって同一の日に実施されることが多いが、できるだけ運動会の現場を見て、プログラムのタイトルと内容を把握していく必要がある。

2点目は、遊びのカテゴリが不明瞭であることである。かつては、運動会において音楽に合わせて身体を動かす遊びは、唱歌遊戯つまり『お遊戯』という言葉

でほぼ共通の理解があった。しかし、本研究で見えてきたように、幼稚園・保育所の運動会で身体を動かす遊びの内容が多岐にわたると同時に、その遊びをあらわす共通の名称が曖昧になっていることも事実である。表現遊び・表現・身体表現・リズム・リズム体操などの用語が用いられるが、それぞれの用語が示している内容を整理していくことも課題として挙げられる。

3 点目は、運動会の日に表現することを繰り返し身

体に蓄積していくプロセスも大変重要で、発表までにそのプロセスを積み重ねていくことの意味の確認が必要であると感じた。また、松田(2008)¹⁹が運動会の捉え方として、日常とは異なる特別の日であると述べているが、特別な日に人の前で演じることによって育つ、子ども達にとっての“育ち”についても、今後さらに検討していきたい。

—注—

- 1 古市久子「身体表現の発達に関する研究の現状と課題」『児童心理学の進歩』 2007 年版 金子書房 2007
- 2 海軍兵学校『海軍兵学校学寮沿革』第1巻 1919
- 3 石附実『近代日本の学校文化史』思文閣出版 1992
- 4 木村吉次, 高橋春子, 勝亦紘一, 川端昭夫「日本の学校における運動会の発達に関する研究」中京大学学術研究会編『中京大学体育学論叢』36(2), 1995, pp. 9-17.
- 5 村山茂代『明治期ダンスの史的研究—大正2年学校体操教授要目成立に至るダンスの導入と展開』不昧堂出版 2000
- 6 高橋春子「明治期運動会に於ける唱歌遊戯・ダンスについての一考察」中京大学学術研究会編『中京大学体育学論叢』39(1), 1997, pp. 1-13.
- 7 岸野雄三 「日本の運動会の由来と特色」体育科教育, 9, 1964, pp. 2-5.
- 8 山本信吉, 今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社 1973
- 9 佐藤秀夫「運動会」大修館書店『最新スポーツ大辞典』1987, pp. 94-97.
- 10 宗高弘子, 前橋明「幼稚園における運動会の現状分析」日本保育学会『日本保育学会大会研究論文集』42, 1989, pp. 562-563.
- 11 松永恵子「運動会と保育形態」日本保育学会『日本保育学会大会研究論文集』43, 1990, pp. 16-117.
- 12 前橋明, 宗高弘子「運動会の歴史的分析」日本保育学会『日本保育学会大会研究論文集』42, 1989, pp. 364-365.
- 13 片山千鶴子, 田中恵津子, 中野真砂子, 丹羽千寿, 森恵子, 脇田町子「運動会の実態と考察(その1)」日本保育学会『日本保育学会大会研究論文集』47, 1994, pp. 498-499.
- 14 佐々木等「幼稚園の運動會(秋晴)」日本幼稚園協會『幼児の教育』39(11), 1939, pp. 6-8.
- 15 土川五郎 日本幼稚園協會『幼児の教育』39(11), 1939, pp. 8-11.
- 16 岡崎修子「運動會(保育の實際)」日本幼稚園協會『幼児の教育』46(9), 1947, pp. 24-26.
- 17 坂内みつ「動作遊戯ピョン太郎の運動會」日本幼稚園協會『幼児の教育』23(1), 1923, pp. 21-22.
- 18 安田美津子「運動会における表現活動(<特集>第二回児童文化研究集会 研究発表集)」上田女子短期大学『児童文化研究所所報』2, 1980, pp. 43-53.
- 19 松田恵示「(特集 子どもとスポーツ) (学校体育を考える) これからの運動会のあり方を探る」金子書房『児童心理』62(14) (通号 884), 2008, pp. 1376-1380.